

幼児語はなるべく避けて

習慣というものは、ちょっとしたことでも、なかなか改めにくいものです。改めようと思えば簡単に改められるはずですが、そうは理窟通りにいかないのが習慣というものです。

だから、初めが大切なのです。それで、私は、なるべく幼児語を使わないようにしようと考え、自分の子供にその方針で接しました。「幼児語を使うので幼児は可愛い」と、思いがちですが、決してそうではありません。幼児が可愛いから幼児語が可愛く聞こえるのです。

どんな言葉でも、幼児の言葉、とりわけ、わが子の言葉は可愛く聞こえます。だから、なるべく途中で直さなくても済む言葉を教えた方が、子供のために良い、と私は思います。

ただ、幼児には発音しやすい音声と、発音しにくい音声とがあります。たとえば、「サシスセソ」や「ラリルレロ」など、幼児には発音しにくく、“さ”は“だ”に発音されやすいものです。

だから“お父さん”が“お父たん”となり、“ラッパ”が“ダッパ”となってしまいます。その時は、どんなに繰り返して正しい発音を聞かせ、言い直

させても、発音できないのですから、早く直そうとあせってはいけません。

ただ、その誤った発音を真似て、親が同調して言うのは良くありません。親が「お父たんといっちょにあとぼうね」と言っていると、それが正しい言い方だと、頭の中に刻みつけられて、あとで直せなくなってしまふ恐れがあります。

幼児が「ダッパ」と言っても、親が言う時は「ラッパ」でなければいけません。幼児はそのうちに、発音の違いに気づき、それを直そうと努めますので、周囲が良い発音をするように努力していれば、幼児の発音も自然に立派な発音をするようになっていくものです。幼児の誤った発音を直すことより、良い手本を示すことの方が大切です。